

心を開き合ってゲームを創り出そう

－第6学年ボール運動「ソフトバレーボール」－

今村昌禎

1 はじめに 一心を開き合った空間づくり

最近授業中に、まわりの仲間の視線を意識するあまり、体の動きや考えが固まっている子どもたち、そして、まわりの仲間の考えや動きを条件反射的に非難してしまう子どもたちを見かける。これでは思いっきり運動する楽しさを味わうことができない。子どもたちが互いの心を開き合った空間の中で、真のかかわりあいを大切にしたい体育授業をめざしていきたい。

そこで、一人一人がみんな違うという認め合いから出発し、互いの知恵を絞り出し合いながら活動することによって、自分たちが求める学習（＝運動）を創りあげることが必要と考え、次のような子ども像を掲げて実践していくことにした。

めざす子ども像

自分たちの心と体を見つめ、みんなが楽しめるようにみんなでゲームを工夫したり、作戦を考え出したりして活動することにより、運動の楽しさを味わう子ども。

2 実践でのこだわり ー自立に向かう子どもたちの姿：「三つの『り』の訓からー

(1) 運動へのこだわり

① 遠心型学習モデルを基本に

自分たちにルールを合わせゲームを創りあげていく考え方で、みんながゲームの楽しさや競争の意味を共有できるように「自分・仲間・運動」とのコミュニケーションを子どもたち自身の手によって成立するようにしていった。そのために、自分や仲間の心と体をじっくり見つめられるようにし、一人一人がみんな違うという認め合いから出発した。異なった個性の全員が、共に競争を楽しむためにはどうしたらよいかを体験を通して学習を創りあげていった。

〔授業づくりのポイント〕

① 自分や仲間の心と体を見つめる場（＝対話）を設ける。（指導者の声かけ、ふり返り）

② 子どもの実態や欲求を基本に据え、子どもと一緒にゲームづくりをする。

〔第一次〕ボールに慣れ親しむ&ボールに対する自分の力を知る（遊びから）

ネットを境に1対1→○対○でゲームを楽しむ

〔第二次〕チーム単位でゲームを楽しむ（対抗戦）

〔第三次〕クラスで創りあげたゲームを楽しむ（リーグ戦）

〔ルールづくりのポイント〕

ボール、ネットの高さ、勝敗、サーブ、返球回数、ワンバウンド、審判・反則、ローテーション

② ボールを弾く感触を大切に

ボールを扱う技術として、「投げる」「捕る」「ける」「突く」「転がす」「打つ」ことはしてきたが、「弾く」という技術を利用しながら、ゲームに取り組むことが少なかった。そこで、まずボールを弾く感触を楽しむから出発し、ゲームを通して段階的に技術を習得していった。最終的には、ボールを弾く練習方法を教師からも紹介した。

ノーバウンドのボールを弾くことが難しい子どもには、ワンバウンドボールを採用する。ボー

あげていく考え方で、みんながゲームの楽しさや競争の意味を共有することができる。異なった個性の全員がともに競争を楽しむためにはどうしたらよいのか、一人一人の異なった経験から得られる小さな知恵を出し合い、その知恵をみんなが受け入れて試みるというやわらかな雰囲気をつくることが期待できる。

(2) 指導目標

- ① 攻め方や守り方の作戦、ルールを工夫し、ラリーの応酬のあるゲームを楽しむことができるようにする。
- ② 一人一人の力を認め合いながら、チームワークを盛り上げたゲームを行うことができるようにする。
- ③ ルールを守り、安全に気をつけてゲームを行い、次に活かせる評価をすることができるようにする。

(3) 指導内容と計画（10時間）

第一次 学習の見通しを持つ（4時間）

- ◇ボールに慣れ親しむ
- ◇ネットを境にゲームを楽しもう（試しのゲーム）＝仮のチームで
- ◇チームづくり（教師と体育の学習係の子ども）

第二次 工夫したルールで作戦を立ててチーム対抗ゲーム（3時間）

- ◇対戦したいチームと練習試合
- ◇作戦を立てながらチーム力を高める

第三次 クラスで創りあげたゲームを楽しもう（3時間）

4 子どもたちの反応 一真のチームワークと勝利から楽しさを一

(1) 自分と仲間を認め合う評価活動について

子どもたちが自分や仲間・チームの心と体に注目するように、毎回の授業のふり返りを大切にしていた。ふり返った点を授業に活かすように、ふり返りから次に活かす点をはっきりするようにしていた。

	授業のふり返り	次回の授業に活かす点
チーム	<ul style="list-style-type: none"> ◇目標についての3段階評価 ◇進歩や向上した点を見つける ◇改善点とそのための工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ◇チームの目標づくり ◇練習のしかたやルールの工夫 ◇ゲームの作戦づくり
個人	<ul style="list-style-type: none"> ◇目標についての3段階評価 ◇自分の心と体にひと言 	<ul style="list-style-type: none"> ◇個人の目標・課題づくり
	◇キラリと輝いた心と体の一瞬（クラス・チーム、仲間、自分）	

① チームや個人のふり返りについて

- ◇チーム内の互いの思いを出し合う中で、互いの思いを知り、何を大切にしていけば勝利やチームワークにつながるのか、前向きに考えていた。
- ◇授業が進むにつれて、より具体的でチームや個人にあった作戦や課題を見つけ出されていった。
- ◇チームや個人（自分、仲間）を見つめる目が育ってきていた。
- ◇前時のふり返りをゲームに活かそうと、課題を意識してプレーに臨んでいた。

② キラリと輝いた心と体の一瞬について

◇最初は否定的な考え方でそれぞれのプレーを見ていたが、互いのよさを認め合う中で、まわりのよさを自分の中に取り入れようとしていった。

◇まわりの人に認めてもらえることが励みとなり、意欲的な活動に結びついていった。

(2) ゲームづくりについて

① ルールづくり

いよいよゲームとしてスタートする第二次第1時に、今までの子どもたちの動きを見て、次のようなルールを教師の方から提案した。

— スタートルール —

① 1回のゲーム=10~15点先取。

② コート内2~4名。ローテーションあり (サーブ権が来たとき)

③ サーブについて

◇ コートの後ろ半分から+下から。

◇ 1人1回。

◇ 得点にかかわらず、1回ずつチーム交替で。

④ 打ち方&パス

◇ できる限りノーバウンドで。

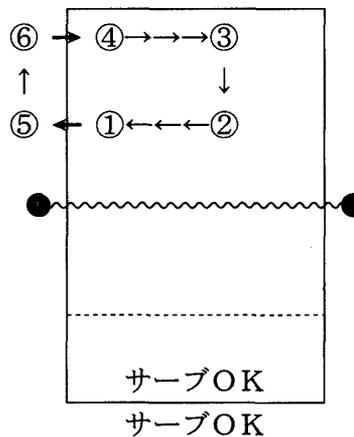
(話し合いでワンバウンド1~2回OK)

◇ 返球回数=5回以内

⑤ 審判&反則

◇ セルフジャッジ

◇ ネットタッチ (わざと危険な場合→話し合いで決める)



毎回のチームのふり返りで、ゲームを楽しむことができるようにとルールの工夫について検討していった。考えついたルールを全体に紹介し、採用していった。

— 工夫するルール —

① サーブは上からでもOK。(=下からでは入りにくいから)

② サーブを失敗したら、もう1回はOK。(=サーブの失敗が多くおもしろくない)

③ 〇回以上パスをしてから、相手コートに返す。(=みんながボールに触るように)

④ 2回続けてさわってOKは×(=分かりにくくなるから)

⑤ ネットにボールが当たっても得点には結びつかない。 **確認**

⑥ 得点を変える人は、コートの外にいる人がする。 **確認**

⑦ バスケットゴールなど違うものに当たったときは無得点とする。

② 見つけ出したボールを上手に扱うコツ

子どもたちは、「ボールを上手に扱うコツ」を次々と見つけ出していった。工夫するルールと同様に全体に紹介し、子どもたちが上手にプレーできるように活かしていった。

— ボールを上手に扱う3種類のコツ —

A=ボールコントロール (ねらいどおり&やわらかく)

C=相手チームが嫌がる返球

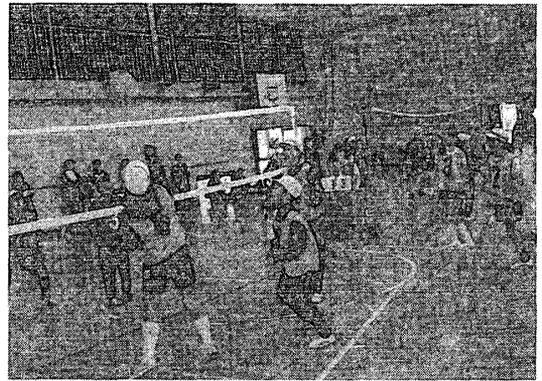
B=味方にパスをつなげる

第一次 ボールとの対話&試しのゲーム

1. ボールの中心を打つ。(A)
2. 力の加減をして打つ。(A)
3. 両手でいねいに打ち、ボールに手が届きにくい時はこけても片手で打つ。(A)
4. 指を開いて両腕を伸ばしながら打つ。(A)
5. ねらいを定めてから打つ。パスしたい人の上に軽く打つ。(A・B)
6. ボールの動きをよく見て、素早く動いて打つ。立っただけではダメ。(A・B)
7. ボールを高く上に上げる。[斜め前に、頭より高く](A・B)
8. ボールの行ってほしい方向に体を向ける。[パスする相手を見てから](B)
9. 声をかける [とる時、誰にパスか](B)
10. 1人2回続けて打てるので、1回目で頭上に上げ、2回目でとりやすいボールにする。(B)
11. 速いボールをゆっくりボールに変身させる。(B)
12. 空気を入れる口の所を打ってはダメ。(A)?

第二次 工夫したルールで作戦を立ててチーム対抗ゲーム

13. 腰を低くして構える。(A・B)
14. ひざを伸ばす力を利用する。(A・B)
15. ボールを当てる位置を意識する。(A・B)



5 実践のふり返り

(1) 自分と仲間を認め合う評価活動について

自分自身や仲間・チームをしっかりと見つめて、肯定的に認め合う雰囲気を大切にしながら評価活動を積み重ねていくと、互いのよさを引き出し、声をかけながら生き生きとしたプレーに結びついていった。もちろん、自分やチームの目標や課題が明確になったので、意欲的に取り組んでいたのであろう。もっと評価観点を開発し、心を開き合っている評価活動を積み重ねていくと、やわらかな雰囲気の中で活動をすることができるであろう。

(2) ゲームづくりについて

自分たちにあったルールを工夫したり、体験を通してボールを上手に扱うことを見つけたりしたことを共有化していく中で、クラス全員が楽しめるゲームを創り上げることができていった。だが、まだゲームを味わう段階までには至らなかった。味わうには、複数の学年で学習を積み上げていく必要を感じた。

6 おわりに

自分や仲間の心と体をしっかりと見つめながら、互いの違いとよさを認め合うこと、自分たちにあった運動に創りあげることを通じて、心を開き合った空間をつくっていかうとした。しかし、まだまだたくさんの課題が残されてしまった。心を開き合った空間づくりのためのかかわりとはどういったものなのか、これからもいろいろな角度から探っていきたい。

参考文献

- 1) 細江 文利、『子どもの心を開くこれからの体育授業』、大修館書店、1999
- 2) 工藤 憲、「誰もが熱中するソフトバレーボール」、学校体育2月、2000、日本体育社
- 3) 日本ソフトバレーボール連盟、『ソフトバレー・ハンドブック』大修館書店、1994